

カラー版 消化器病学—基礎と臨床—

浅香正博/菅野健太郎/千葉勉 編集

初めての本格的なテキスト

青森県病院事業管理者 青森県立中央病院長

吉 田 茂 昭

何とも壮大な教科書が刊行されたものである。全1,560頁、執筆者は何と482名にもなる。これだけの執筆者を抱えながら、目次の作成作業から3年余りで刊行に漕ぎ着けられたことには驚きを禁じ得ない。通常、稿を急がせると内容が雑に流れるきらいがあるが、編者の浅香正博、菅野健太郎、千葉勉の各氏は、今や消化器病学の領域において、正に油の乗りきった第一人者中の第一人者であり、その厳しい監修のため各章とも内容がわかりやすく、これだけの執筆者が分担したとは思われないほど統一性に優れ、さらに短期間に刊行されたことの最大のアドバンテージとも言えるが、正に最新の知識で埋め尽くされている。

本書における最大の特長の一つはカラー写真を多用している点であろう。消化器病学は、常に画像診断と表裏一体の関係にあることから、画像診断情報をいかに正しく理解するかが、診療や研究における勘所となっている。ことに、最近では、内視鏡領域の進歩が著しく、微細診断から治療に至る様々な知見が、消化器病学の進歩をリードしているが、

内視鏡所見は病理組織学所見とともに、カラーでなければ詳細の理解が難しい。おそらくそのことが、これだけ多くのカラー写真を必要としたのであろうが、ただ単に多いというだけではなく、いずれも美しく内容の溢れる写真が示されており、これにより、文字情報からだけではなく画像情報からも診断学、治療学の神髄を理解できる内容となっている。

消化器病学における世界的な教科書として名高いBockusのGastroenterology(1974年版、全4巻)を、今、改めて書棚から取り出してみると、カラー写真は皆無であり、文字情報がいかに多くを占めているかがよくわかる。その後、約40年、コンピュータ、ゲノム解析、化学療法等々の領域では、20世紀の産業革命とも言うべき'90年代の技術革新の時代をくぐり抜け、これまでの認識を一変させる大進歩を遂げた。その結果、疾患本態に迫る診断学、過不足のない治療学、新たな疾患概念等々が次々と生み出されたのであるが、換言すれば、Bockusの時代と比べ、今日では学ぶべき知識量は莫大に増加しているのである。にもか

かわらず、徒に紙数を増やすことなく、内容をコンパクトに、かつ、わが国の最新の研究成果についても余すところなく伝えている。

診察手順からはじまり、消化器臓器の構造と機能、症候学、臨床検査、画像診断、内視鏡診断、感染症等を総論として取り上げ、消化器疾患各論へと読み進める編集方針はきわめて実際のであり(特に症候学は秀逸である)、学生諸君は無論のこと、専門医にとっても常に傍らに置いておきたい一冊であろう。序文において浅香先生は英語版の刊行について触れられているが、常に身近に置いておきたいという意味で、電子版の刊行も強く期待されるところであろう。

執筆を担当された先生方の今後のさらなる研究の深化を期待すると共に、改訂を重ねられ、永遠の教科書として用いられることを衷心から願ってやまないところである。

●B5 頁1,560 2013年
定価: 本体19,500円+税

西村書店 刊(☎ 03-3239-7671)